



「14世紀の危機」についての文理協働研究

歴史学、考古学、博物館学
およびその関連分野

研究者所属・職名 : スラブ・ユーラシア研究センター・
特任准教授

ふりがな いさはや よういち

氏名 : 諫早 庸一

主な採択課題 :

- [基盤研究\(B\)「14世紀の危機」についての文理協働研究\(2021-2024\)](#)

分野 : 史学一般関連、環境史

キーワード : 14世紀の危機、モンゴル帝国、黒死病、ユーラシア史、中世温暖期、小氷期

課題

●なぜこの研究をおこなったのか？(研究の背景・目的)

この研究の目的は、「中世温暖期」から「小氷期」への生態環境の移行期にあたる14世紀に起きた、1) 気候変動、2) 社会動乱、3) 疫病流行からなる「複合危機」の全体像を解明することであった。研究の背景には、世界史の転換期の1つであるこの「14世紀の危機」が、これまではヨーロッパの枠組みでのみ考えられてきたことがある。当時、ユーラシアの多地域を支配していたモンゴル帝国(1206~1368年)を中心に、この複合危機を広くアフロ・ユーラシア規模で考察した。

●研究するにあたっての苦労や工夫(研究の手法)

アジア史、ヨーロッパ史、古気候学と、文理の枠を超えた多分野の研究者たちが協働するにあたって、それぞれが依拠する古気候データや文献データのアーカイブ(根の部分)の性質について互いの理解を深め、それをを用いた研究分析(幹の部分)を報告し合い、それぞれの成果(葉の部分)を組み合わせるとどのような全体像が描けるのかどうかについて議論を重ねた。互いの分析の時間スケールの違いに目を向けることで、これまでの認識とは異なる危機の動態が見えてきた。

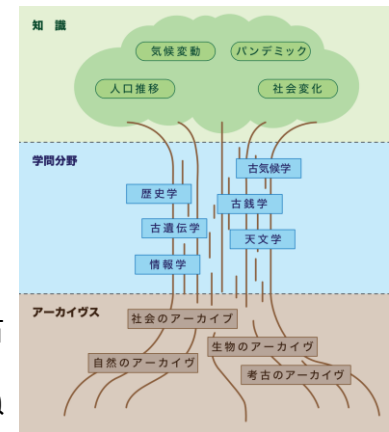


図1 文理協働 学問樹モデル



「14世紀の危機」についての文理協働研究

歴史学、考古学、博物館学
およびその関連分野

研究成果

●どんな成果がでたか？どんな発見があったか？

アフロ・ユーラシア規模で「14世紀の危機」を考察することにより、危機の地域的な多様性を具体的に明らかにすることができた。ヨーロッパでの「14世紀の危機」の始まりは、寒冷化と多雨による「大飢饉」（1315～22年）であることが知られていたが、東アジアはヨーロッパとは異なり、1290年から1320年まで一貫して平均気温が上がり続ける。しかもこの地域において一般的に気温とは逆相関の関係にある降水量も、1320年代においては下降せず、この時期において中国では洪水と飢饉とが頻発していることも発見した。

西アジアにおいては、アルプスの年輪データから（図上）、1260年代末から80年代に関して顕著な寒冷化が見られることが明らかになった。1280年代は、モンゴル帝国の複数の政体が不安定化する時期であり、この時期は太陽活動が減退する「ウォルフ極小期」の開始時期とも重なる。ただし、この時期の中央アジアは例外的に高温多湿であった（図下）。そしてこの地を拠点とした勢力の伸長がまさにこの時期なのである。

さらにヨーロッパで「14世紀の危機」を最大化した「黒死病」についても、この悪疫のヨーロッパへの到来は1348年であるが、最新の研究はこのペスト・パンデミックの震源が、14世紀前半の天山山麓付近にあったことを示している。本研究は、「14世紀の危機」がアフロ・ユーラシア規模で見れば従来ヨーロッパで考えられてきた時期よりも早いこと、危機のタイミングやその具体相には相当な地域偏差があることを発見し、個々の危機の複合や地域間の危機の連鎖を含めた、危機の動態を明らかにすることができた。

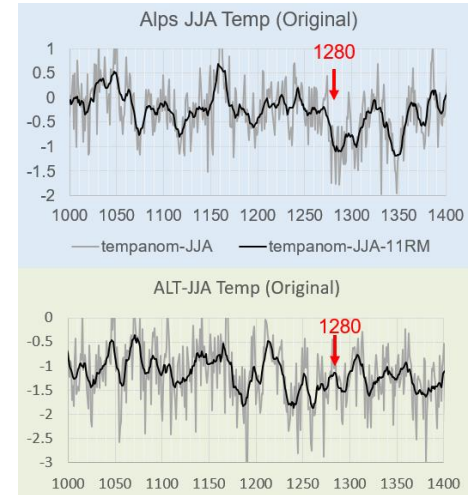


図2 アルプス（上）とアルタイ（下）の年輪データ

今後の展望

●今後の展望・期待される効果

本研究での成果により、「14世紀の危機」について、1) 地域的な多様性：異なる気候、2) 時代的な多様性：いつが「危機」であったのか、3) 史料の語り方：「危機」はどのように語られたのか、4) 危機のサイクル、5) あらたな時代・勢力の胎動という5つのテーマが重視されるべきものとして浮かび上がってきた。「14世紀の危機」をアフロ・ユーラシアの人間社会と生態環境の連環のなかで動的に捉えるための焦点が定まり、さらに多分野の協働をもってこの研究を深化させる基盤作りができたと言える。

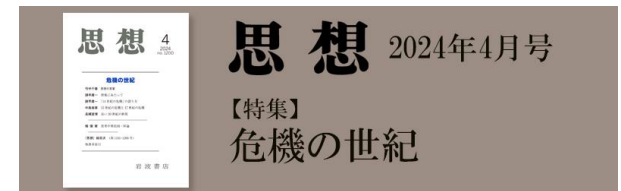


図3 『思想』2024年4月特集号「危機の世紀」